

文章作成能力向上を目的とした歴史の授業

—学びあいによる学習意欲の向上—

岡本和也*

1. はじめに

筆者は久留米工業高等専門学校において、2年生全5学科約200名(1学科1クラス約40名)に「世界史」の授業を通年週1回(1コマ90分)行い、その延長上に3年生4学科約160名の学生に「人文社会科学探究I or II」の授業を半期週1回行っている。これらの授業では、古代から現代に至るまでの大きな歴史の流れを把握し、歴史的知識を獲得することを通じて、論理的思考力を養い、論理的な文章を作成する能力を向上させることを目的としている¹⁾。この目的を達成する手段として、レポート作成と論述問題による成績評価を行っている。本稿では論述問題について報告する。

2018年度までは前期末試験期間と学年末試験期間において、論述問題による試験を実施し、レポートと合わせて成績評価を行っていた²⁾。また、論述問題に慣れる目的で、授業中に半期に1~2回、論述問題を実施し、それらは成績評価に加えていなかった。

そして、試験前の最後の授業を試験に関する質問の時間とすることで、試験勉強をしてきていない学生も、他の学生の質問を理解しようと勉強するようになった。さらに、理解した学生が理解していない学生に教えるという学びあいの場が構築されていた。

この授業で学生は、いい成績をとりたい、という思いをきっかけに、学びあいによって、学習意欲が向上していったと言える。しかし、通常の授業ではこういった光景をほとんど見るができない。試験前に勉強することは大切ではあるが、それよりも日常的に勉強する習慣をつける方が大切であり、試験前だけ勉強しても学び続ける意欲を身につけることにつながりにくいと考えている³⁾。

試験前の最後の授業では、ここで勉強すればいい成績が取れる、という理解が浸透していた。そのため、通常の授業でもそのように理解してもらおうと、授業中に実施している論述問題を成績評価に加えることにした。そして、論述問題に関わる授業が学習意欲を向上させる学びあいの場になるように設定し、前期末試験期間と学年末試験期間における論述問題は実施する必要がなくなったため廃止した⁴⁾。このように授業を変更したのは2019年度からであり、本稿はその報告である。

2. 論述問題について

論述問題では、授業内容を理解して、それを表現することを求めている。正解を書こうとして、解答例や他の学生の解答を写すことで、自分が理解していない表現や単語を書いてしまうことを防ぐためである。書き手が書いている内容を理解していない場合、その意図は読み手に伝わらないことを強調し、自分の理解していることを伝えるために文章を書くように指導している⁵⁾。

また、問題では書くことを3つ程度指示し、最初に書いた2つのことを根拠として、3つめのことが結論となるようにしている⁶⁾。このような問題の解答を書くことで、この根拠からはこのことが言えるが、この根拠からはこのことは言えない、といった論理的思考力を養い、論理的な文章を作成する能力が向上するはずである。

3. 論述問題授業の構成

まず論述問題に関連する講義を行い、次の授業で解答を作成する。そして、そのあとの授業で講評する。これらの連続した3回が論述問題授業となる。

1回目は、授業の冒頭で論述問題を提示し、今回はこの問題に関連することを講義し、次回を解答を作成する時間とするため、どのような解答を書くべきなのかを考えながら講義を聞くように説明する。

2回目は、まず、文章を書くときの基本的な注意事項を説明する⁷⁾。次に、前回講義したことを論述問題の解答に沿ってもう一度説明し、解答としてどのようなことを書けばいいのかを理解してもらう。そして、どのような文章を書くのかを考える時間を5分ほど与えてから、いくつかの解答例を見せ、イメージを作ってもらっている。多くの学生は論理的な構造をもつ文章を書いたことがほとんどないため、どのようなことを書くのかを理解していても、どのように書けばいいのか分からない。そのため、いくつかの解答例を見せることは必要である。ただし、解答例を見せると、自分で考えずにそれを写してしまう学生もいるため、どのように書けば自分の理解していることが伝わるのかを考えるように指導している。そして、授業開始40分後くらいに解答をいったん書き終える。

そのあと、まわりの学生と解答を交換し、他の学生

*久留米工業高等専門学校

の解答を2枚以上読み、自分の解答を2人以上の学生に読んでもらう。他の学生の解答を読む時は、どのように書けば自分の理解していることが伝わるのかを実感するために、どのように書いてあれば他人の理解していることが自分に伝わるのかを考え、自分の文章との違いを見つけるように指導している。そして、一枚の解答に10分ほど使って、見つけた違いが取り入れたいと思うような表現であるならば、そこに下線を引き、このように書きなおした方が分かりやすいのではないかと思う表現があるならば、そこに修正コメントを書き加えるという具体的な課題を与えている。

他の学生の解答を二枚以上読んだあと、書き込みがある自分の解答を読み直して、書きこんでくれた他の学生の意図を考え、分からなければ本人に聞く。そして、どのように書けば自分の理解していることが伝わるのかを実感するために、自分の理解していることが伝わっているかを聞くように指導している。それから、自分の解答を修正する。この修正においては、他の学生の解答で自分が取り入れたいと思った表現を、何らかの形で自分の解答に反映させるように指導している。良い文章と思っても、自分の文章に取り入れておかないと、今後の改善につながりにくいからである。

この解答をいったん書き終えたあと、まわりの学生と解答を交換し、自分の解答を修正する時間が学びあいの場となっており、この学びあいによって多くの学生の学習意欲が向上することがこの授業のねらいである。

このような過程を経て、完成させた解答を提出する。この論述問題は半期に2回行っており、能力をより発揮できた答案で成績を評価すべきと考え、得点の高い方を採用している。

そして、3回目の論述問題授業で、採点した答案を返却し、学生の解答の中から、分かりやすい表現や分かりにくい表現を紹介し、今後の文章作成の参考にしてもらっている。

4. おわりに

このように、これまで成績評価に加えていなかった授業中に実施している論述問題を、成績評価に加えるように変更し、論述問題に関わる授業が学びあいの場

になるように設定することで、多くの学生の学習意欲が向上した。そして、定期試験を廃止したことで、試験対策に使われていた労力が日々の授業に分散した結果、授業が充実する方向に変化したのではないかと感じている。

成績評価は難しく、授業態度を成績評価に入れるように要望する学生もいれば、この授業のように論述問題やレポートだけで評価することに抵抗がある学生もいる。そもそも論述問題への批判もあり、一問一答のような試験を実施し、知識力を計ることで成績を評価してほしいとのコメントも絶えない。

しかし、この授業に関する学生からのコメントには、自分の解答を他の学生に読んでもらうことや、自分が他の学生の解答を読むことはこれまでほとんどなかったため、「これまでとは違う発見があり、より意欲的に授業に取り組めるようになった」とあった。こういった学びあいによる刺激が向上心につながることは、この授業の成果であると感じている。

また、授業中に実施している論述問題を成績評価に加えることによって、学生の集中力が以前より増したことは、学生のコメントからもうかがえた。文章を書くことに苦手意識がある学生も多くの学生と相談しながら解答を作成するため、書くことに取り組みやすくなったとコメントしてくれた。学生同士の意見交換も以前より活発になり、「授業がおもしろかった」とコメントする学生も多く、学びあいを学生が楽しんでいた。

そもそも、文章とはいい成績をとるために書くものではなく、自分の考えていることを他人に伝えるために書くはずである。この授業では、自分の書いた文章をすぐに他人に読んでもらうことで、そのことを実感することができていた。また、読み手の反応を聞くことと、自分が読み手になることが刺激になり、授業に真剣に取り組む学生が増えた。このようにこの授業では、学生の向上心や好奇心を刺激することができ、学びあいというすぐれた学習環境を構築することができた。

このような学びあいの場が構築できるのであれば、課題は論述問題である必要はない。日々の授業に集中して取り組み、考える量と質を確保できる様々な取り組みに今後も挑戦していきたい。

註

- 1) 「【地理歴史編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説」では、全ての教科等の目標や内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理している（https://www.mext.go.jp/content/1407073_03_2_2.pdf（2020年10月27日アクセス））。そして、「歴史総合」の目標は、これらの三つの柱に沿った三つの目標から成り立っている。それらの三つの目標のうちの二つは、「(1) 近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。」と「(2) 近現代の歴史の変化に関わる事象の意味や意義、特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。」である。この授業はこれらの目標にある「諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付け」、「考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」ことを目的としている。本稿における論理的とは、構想したことを筋道立てて効果的に相手に伝えられる状態のことを言う。
- 2) 論述問題による試験については岡本和也「論理的思考力を養う歴史教育—論述試験を通じて—」『久留米工業高等専門学校紀要』25-2, 2010, 15-18, 参照。
- 3) 工藤勇一は定期考査前の一夜漬けでの学習を「悪癖」と表現し、「そうしたプロセスを経て獲得した点数・評価は、その生徒にとっての「瞬間最大風速」にすぎず、それをもって成績を付けたり、学力が付いていると判断することは、適切な評価とは言えません」と指摘している（工藤勇一『学校の「当たり前」をやめた。一生徒も教師も変わる！公立名門中学校長の改革』2018, 25-27）。
- 4) 定期試験廃止については、小宮太郎「定期テスト廃止で学校はどう変わる」『悠』15(5), 1998, 76～79, 参照。西川は、『学び合い』は、教師が一方的に教える授業とは違い、子ども同士が主体的に学び合い、教え合う授業です。」と説明している（西川純『人生100年時代を生き抜く子を育てる！個別最適化の教育』学陽書房2020, 40）。本稿における「学びあい」は西川の『学び合い』を参考としている。
- 5) もう一つの成績評価の課題であるレポートは、教科書を批判的に検討し、教科書の修正文を提示するものである。このレポートは自分で調べて書くものであり、論述問題は授業で説明したことを書くものである。論述問題とレポートは自分の理解していることを伝えるために書くという意味で共通しており、論述問題はレポート作成の前段階としても位置付けられる。レポート作成については、岡本和也「論理的思考力を養う歴史教育—アクティブラーニング型授業の実践事例として—」『日本高専学会誌』25-1, 2020, 55-60, 参照。
- 6) 問題例としては、「なぜ大ピラミッドはクフ王の墓であると考えられるのか、ヘロドトスの記述を根拠として説

明せよ。また、その根拠の問題点を説明せよ。そして、それを根拠として大ピラミッドがクフ王の墓であると判断できるかどうかを記せ。」や「『死の舞踏』からその当時がどのような社会であったと考えられるのか、説明せよ。そして、その社会ではペストが流行することにより、農民反乱が起きたと考えられるが、その因果関係を説明せよ。」が挙げられる。

- 7) この授業では、文章を書くときの基本的な注意事項として、「段落を作る・ですます調で書かない・話し言葉で書かない・主語・述語を明確に書く・体言止めを使わない・一文を短くする・接続表現を活用する・句読点を使う」ことを伝えている（小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』講談社, 2002, 32-42, ; 森谷公俊『学生をやる気にさせる歴史の授業』青木書店, 2008, 44-56）。